

丹後地域における畿内型横穴式石室の系譜

細川 康晴

1. はじめに ー畿内型石室導入以前ー

丹後地域における横穴式石室の導入の問題については、これまで一定の整理を試みてきたが、本稿では、特に当該地域の畿内型横穴式石室の導入について整理し、問題提起としたい。

畿内型石室の検討に入る前に、丹後地域の導入期の横穴式石室については、先に検討したとおり現在次の3つの類型に分けて考えているので要約しておく。すなわち、(1)北部九州系横穴式石室、(2)畿内型横穴式石室、(3)竪穴系横口式石室の3つの類型である。

(1)の北部九州系横穴式石室については、丹後地域では現在その分布が加悦町入谷西A1号墳や宮津市霧ヶ鼻11号墳等野田川流域のみに限られる。片袖傾向の強い両袖式石室であることは、その成立に北部九州系石室に対する畿内型右片袖式石室の袖型式の強い関与が想定される。また、この種の北部九州系石室の片袖指向化は、畿内のなかでも奈良市ムネサカ4号墳のように大和の縁辺部にもみられるほか、若狭・紀伊さらに北部九州のなかでさえも確認でき、この種の石室が点的に広域にわたり構築されている背景は、古墳時代後期前半の北部九州と畿内及び丹後・若狭・紀伊の各地域の関係を検討する上で重要な視点のひとつである。

(2)は畿内型横穴式石室であり、本稿の検討の対象とするものである。大別型式として袖部平面型式により(右・左)片袖式及び両袖式の2型式がある。

(3)は竪穴系横口式石室及びその後続墓制である。これらは時期による形態変化に乏しく、個体差が著しく系譜が追い難い。また、丹後地域においては前壁構造の有無が確認できるものが皆無で、現状では竪穴系横口式石室とその後続墓制である横口部を持つ石室を形態上から分別することは不可能である。現状での分布は網野町離湖周辺から竹野川中流域にかけてやや分布密度が高い。この類型の石室には弥栄町遠所1・2号墳にみられるように副葬品のなかに素環鏡板付轡など装飾性が低い馬具を持つものがあり、小地域の首長墓ないしは群集墳の盟主墳クラスが含まれていることは重要である。また、時期的な面を考慮すると、竪穴系横口式石室ではなくその後続墓制である可能性が高いものの、TK209型式

併行期までこの種の墓制を採用していることはきわめて強い地域の特色であるといえよう。

2. 畿内型片袖式横穴式石室(T K 10 型式併行期～)

(1) 川上谷・佐濃谷川水系の片袖式石室

丹後地域において、現在確認できる畿内型片袖式石室の初現は、川上谷川水系の久美浜町崩谷3号墳(T K 10 型式古段階併行期)である。これは右片袖式で、袖部はやや扁平な石を平積みする袖部段積み構造である。また、羨道幅比率(羨道幅を前壁幅で除したものは)0.56で、袖部幅が大きく中軸寄りに突出し、古相を呈する。一方、玄室長比率(玄室長を奥壁幅または前壁幅で除したものは)2.56で、時期の割にかなり狭長な平面プランを示すことは地域色とみるよりも、石室幅の狭さから一定の墓室空間の確保を玄室長に求めたものとも考えられる。奥壁基底石は均等な幅の2石(奥壁2分割=奥壁技法A 1類)を平積みする。

崩谷古墳群では後続する1号墳(T K 10 型式新段階併行期)では、右片袖式・袖部段積み構造という構成は引き継ぐが、奥壁は大型の石材によりほぼ一石で構成され、隅部に小型の調整石を用いる(鏡石使用への胎動=奥壁技法C 1類)。

畿内型両袖式石室受容後の片袖式石室として、佐濃谷川水系の久美浜町川向1号墳(T K 43 型式併行期)、塚ガ谷2号墳(T K 209 型式併行期)がある。いずれも右片袖式で袖部は段積みではなく、方柱状の石材を用いる立柱石である。川向1号墳では同時期の竹野川水系の丹後町高山1号墳でもみられるように、きわめて細い立柱石を用いることが特色である。

(2) 竹野川水系の片袖式石室

竹野川水系における畿内型片袖式石室の導入は丹後町大成7号墳(T K 10 型式新段階併行期)がその初現である。袖部はほぼ同時期の川上谷川水系の崩谷3・1号墳とは異なり段積みではなく立柱石を用いる。これは用材入手の便による可能性もあるが、竹野川水系では、袖部構成要素として畿内型片袖式石室導入期の当初から立柱石の使用が意識されていたことは、石室構築工人の系譜を検討する上で重要な要素のひとつとなる。また、天井部の遺存状況が悪いものの、天井石の架構状況に注意すると、袖石部分を境に玄室に架構された天井石は羨道部に架構された天井石よりも一石分だけ天井高が高くなり、袖石上方に架構された天井石1石分の内面が前壁を形成するのである。また、左側壁の遺存状況からは、天井は平天井ではなく、玄室中央部が高くなる中高式か、もしくは奥壁側が徐々に高くなる特異な天井構造であった可能性もあり注意を要する。また、奥壁が垂直に積み上げられているのに対し、側壁は基底石から持ち送っている。また、玄室平面形は崩谷3号墳同様がかなり狭長(玄室長比率2.53)である。また、羨道部平面形は崩谷3号墳の長方形プランとは異なり、ハの字形に開く特徴的なもので、形状から羨道部には天井石は架構されなかつ

たものと思われる。

続く丹後町上野1号墳(TK43型式古相併行期)では、大成7号墳でみた側壁基底石からの持ち送りは見られず奥壁・側壁ともに垂直に積まれる。大成7号墳と異なり、奥壁・側壁ともに目地の部分に小石材を詰め込むことが大きな特色であり、近隣の当該期の石室には他に例を見ない構築技法であり、石室構築工人の系譜を考える上の視点となる。

さらに丹後町高山1号墳(TK43型式古相併行期)では袖石に方柱状のきわめて小型の用材が用いられ、これは水系をこえて同時期の川向1号墳に共通する袖部の構造である。このことは、ここに袖部に共通の用材を用いる共通の石室構築工人が関与した可能性もある。また、高山1号墳は左片袖式であり、他の高山古墳群内の片袖式石室がすべて右片袖式であるばかりか、畿内をはじめ他地域と同様に丹後地域の片袖式石室の大半が右片袖式石室であることはきわめて異例であり、独自性を示している。ただし、隣接する若狭地域ではむしろ左片袖式優位である特異な地域であるので、袖型式の差はさらに広範な地域で検討する必要がある。なお、以上検討した竹野川河口部付近の大成7号墳・上野1号墳・高山1号墳の3基は群を違えて、玄室幅はきわめて近似しており、特に上野1号墳と高山1号墳は玄室幅・長ともに近似をみることは玄室平面形に一定の規格が存在することを想定させる。

最後に丹後町高山12号墳では、右袖壁は大型の石材を3石横積みにし、当該期の両袖式石室の構築技法・用材選択に共通するが、奥壁構成は大型石材1石のみでは構成されず1石調整石を縦積みにして調整している点は両袖式石室とは異なる(奥壁技法C2類)。

(3)野田川水系の片袖式石室

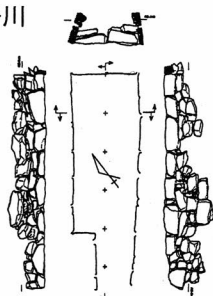
野田川水系では、川上谷川水系・竹野川水系とは異なり、現在のところ、畿内型両袖式石室導入以前にさかのぼる畿内型片袖式石室は知られていない。加悦町滝岡田古墳は奥壁2段構成、河ノ辺1号墳は右側壁3石横積み構成であり、当該期の両袖式石室の構築技法・用材選択に共通することは、前述の高山12号墳と同様だが、滝岡田古墳では側壁の用材が平積みを基調とし、大型石材を用いず、河ノ辺1号墳では奥壁が1石ではなく、高山12号墳と同様に1石調整石を縦積みにして調整している。

3. 畿内型両袖式横穴式石室の系譜(TK43～TK209型式並行期)

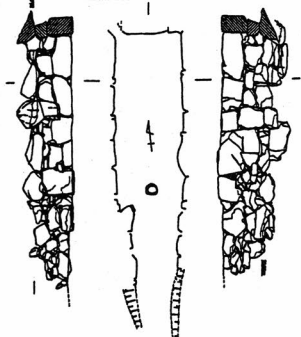
(1)川上谷川水系の両袖式石室

久美浜町平野古墳、湯舟坂2号墳(TK43型式併行期)には、奥壁幅一杯に1石を据える鏡石の使用(奥壁技法D2類)、側壁にも3～4石のみを用いるような巨石の使用がみられ、これまでの片袖式石室とは、用材の巨石化にみる石室構築技法上の大きな飛躍が認められ

川上谷川

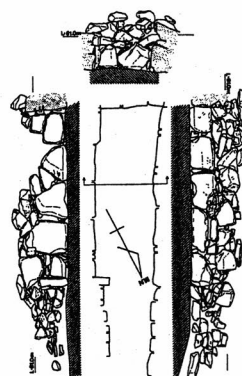


1.崩谷3

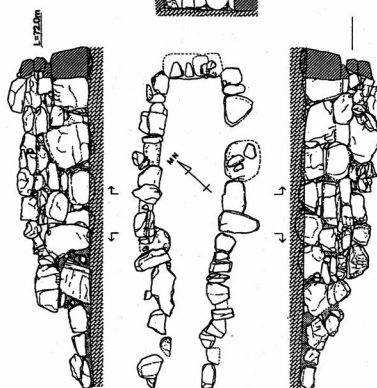


2.崩谷1

佐濃谷川

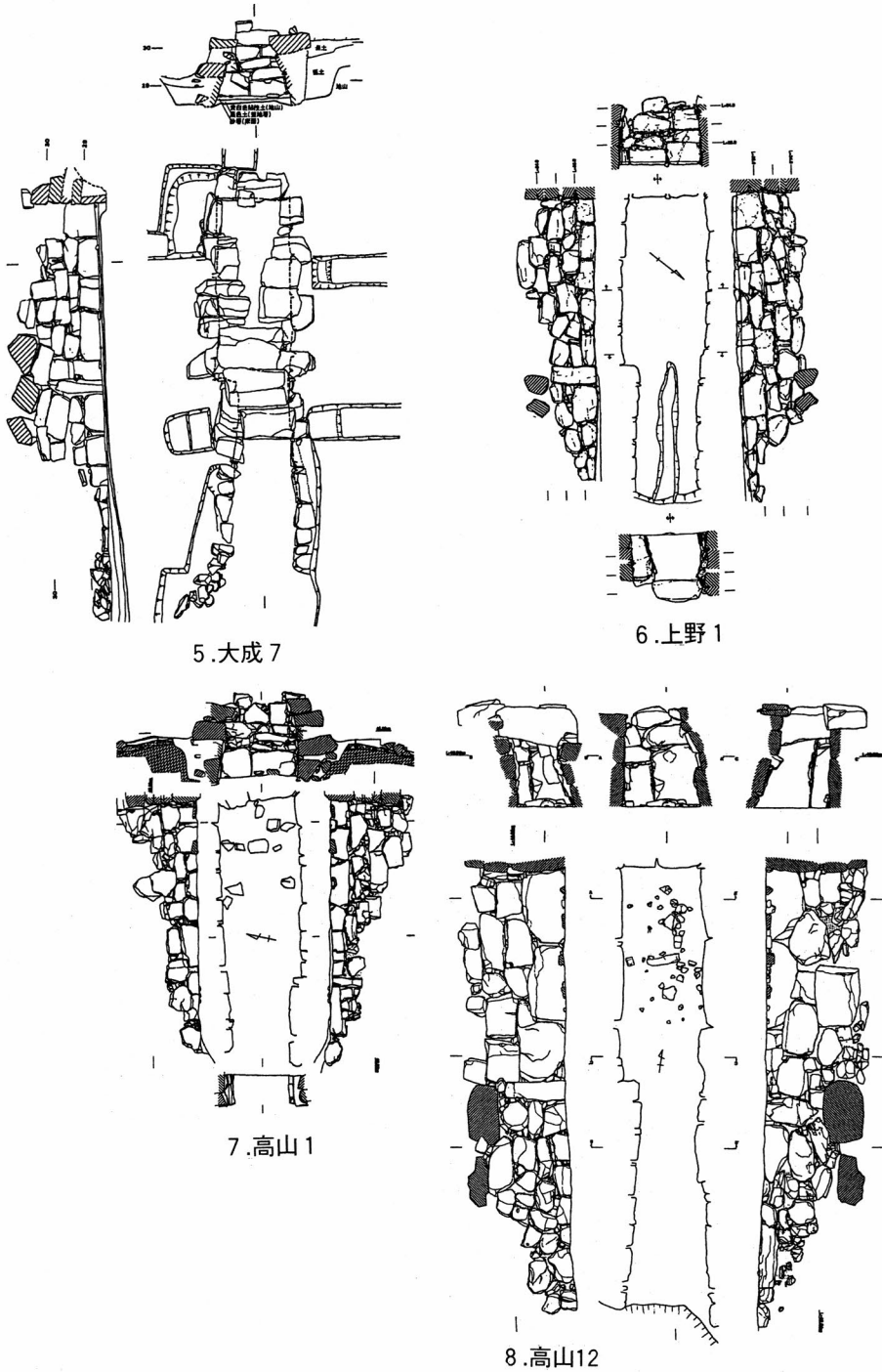


3.川向1

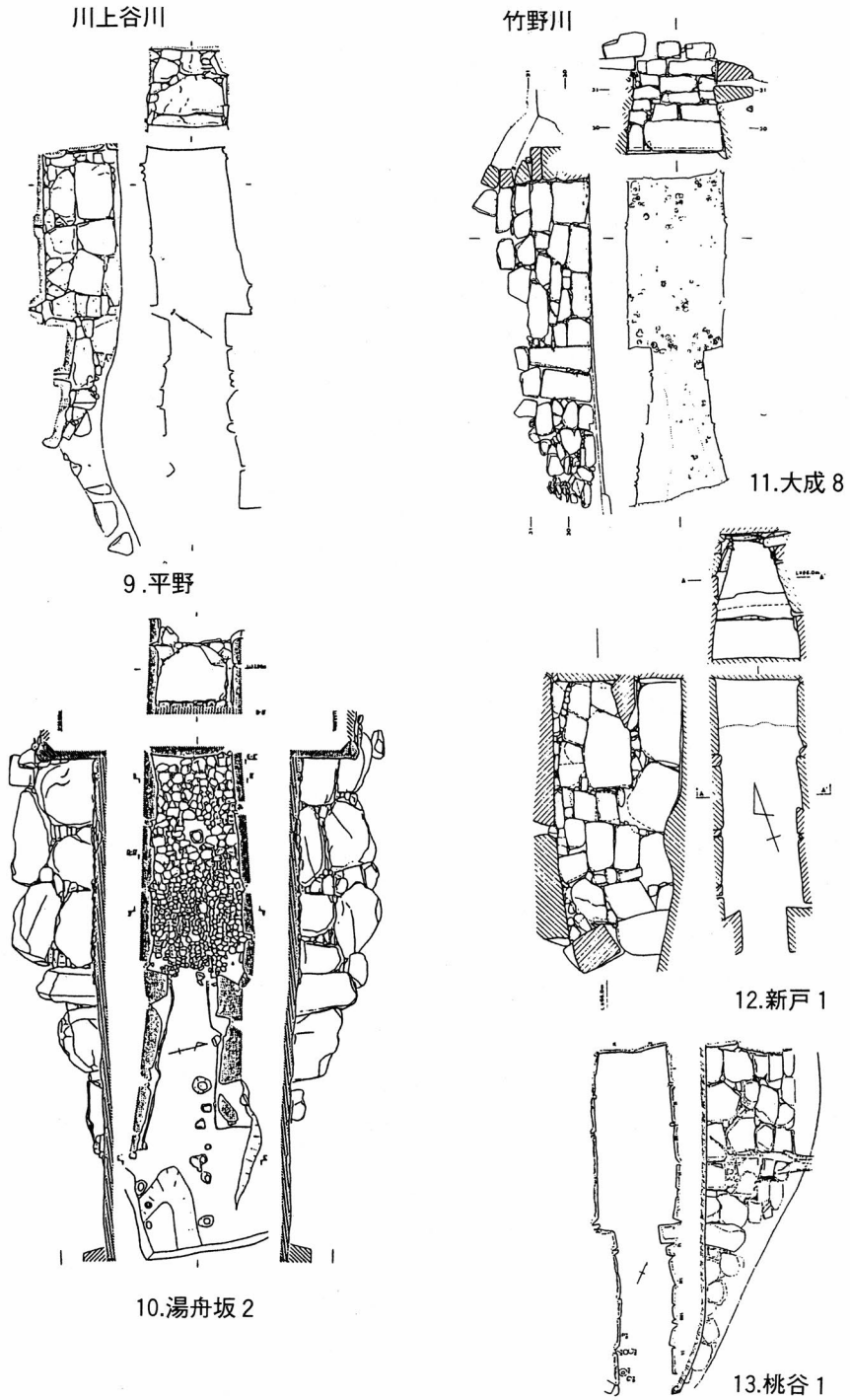


4.塚ガ谷2

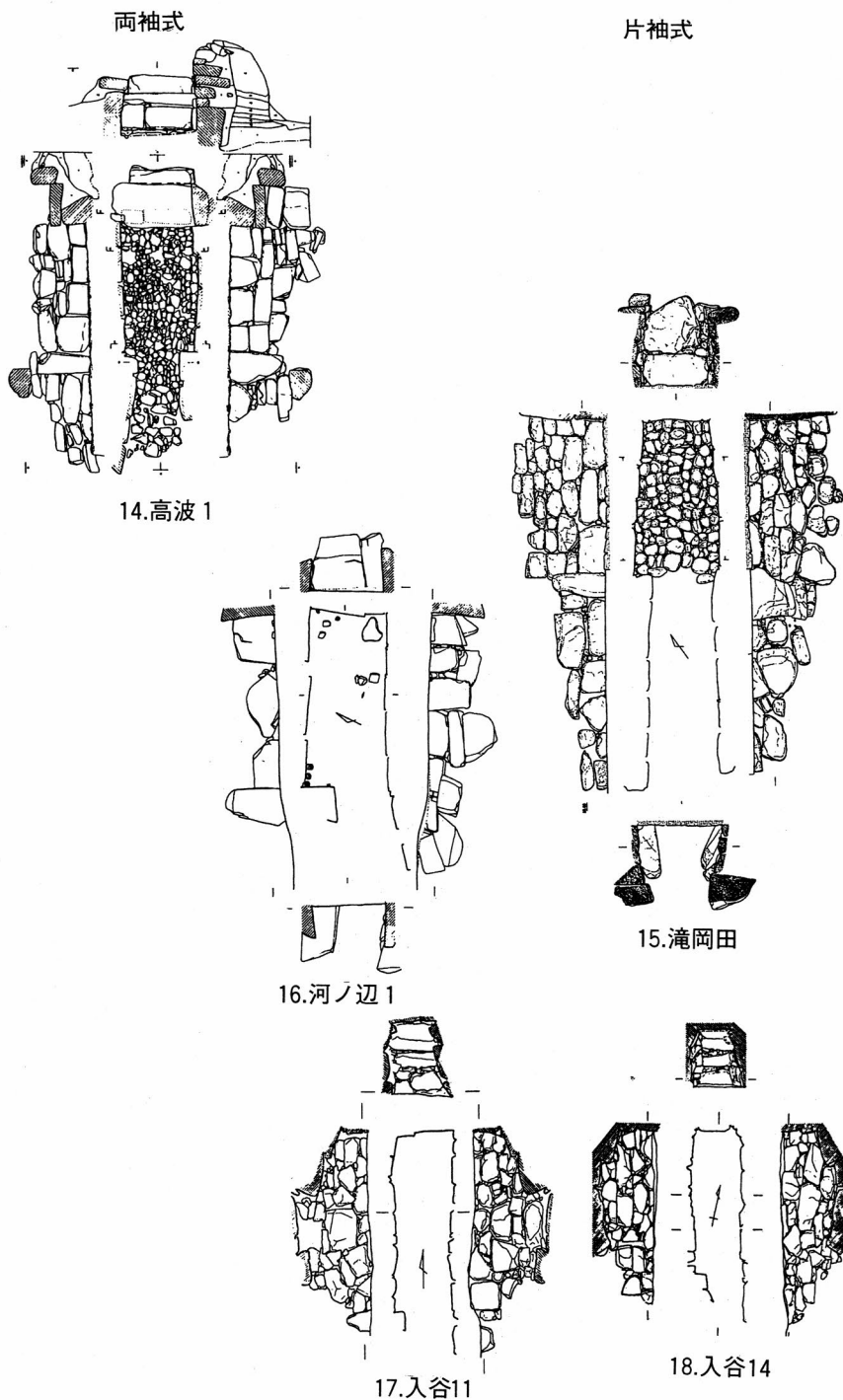
第1図 川上谷川・佐濃谷川水系の横穴式石室



第2図 竹野川水系の片袖式石室



第3図 川上谷川・竹野川水系の両袖式石室



第4図 野田川水系の片袖・両袖式石室

第1表 関係横穴式石室要素表

| | 番号 | 古墳名 | 墳形 | 規模 (m) | 立地 | 群 構成 | 袖型式 | 袖部 構造 | 奥壁基底石の 構成 | 側壁基底石 の構成 | 奥壁幅 (m) | 前壁幅 (m) | 玄室長 (m) | 玄室長 比 | 須恵器 | |
|----------------|----|------------|----------|------------------|-----------|-----------|-----|----------|------------------|----------------|------------|------------|------------|---------------|------------------|------|
| 川上 濃谷 川系 | 1 | 崩谷3号墳 | 円 | 径15~ 16 | 丘陵端 | 3 | 右片袖 | 段積み | A1均等2石 平積 | 6石平積 | 1.75 | 1.6 | 4.1 | 2.34~ 2.56 | TK10 古相 段階 | |
| | 2 | 崩谷1号墳 | 円 | 径(15) | 丘陵稜 | 3 | 右片袖 | 段積み | C11石横積 +調整石 | 5石横・縦 積+調整石 | 1.7 | 1.7 | 4.4 | 2.59 | | |
| | 3 | 川向1号墳 | 円 | 径16 | 丘陵端 | | | 右片袖 | 立柱石 | E2石縦積 | 5石縦・ 横積 | 1.58 | 1.5 | 4.35 | 2.75~ 2.90 | TK43 |
| | 4 | 塚ガ谷 2号墳 | 円 | 径14 | 丘陵稜 | 2 | 右片袖 | 立柱石 | C2大型1石 縦積+調整石 | 4石横・ 縦積 | 1.4 | 1.9 | 3.9 | 2.05~ 2.79 | TK 209 | |
| | 9 | 平野古墳 | 円か 方 | 径また は一辺 20 | 丘陵端 | 単独 | 両袖 | 立柱石 | Dか 大型1 石 | | 2.1 | 2.3 | 4.5 | 1.97~ 2.14 | | |
| | 10 | 湯舟坂 2号墳 | 円 | 径18 | 丘陵端 | 2 | 両袖 | 立柱石 | D2大型1石 縦積 | 3~4石 縦・横積 | 1.96 | 2.44 | 右5.70 | 2.34~ 2.91 | TK43 | |
| 竹野 川水系 | 5 | 大成7号墳 | 円 | 径16 | 台地 | 13基 以上 | 右片袖 | 立柱石 | A2均等2石 平・横積 | 5石平・ 縦積 | 1.9 | 2 | 4.8 | 2.40~ 2.53 | TK10 新相 段階 | |
| | 6 | 上野1号墳 | 円 | 径13 | 台地 | 3基 以上 | 右片袖 | 立柱石 | A2均等2石 平・横積 | 5石平積+ 調整石 | 2.1 | 2 | 4.6 | 2.19~ 2.30 | TK43 | |
| | 7 | 高山1号墳 | 円 | 径13 | 丘陵端 | 9 | 右片袖 | 立柱石 | A32石横積 | 5石平積+ 調整石 | 2 | 1.9 | 4.7 | 2.24~ 2.47 | TK43 | |
| | 8 | 高山12号墳 | 円 | 径18 | 丘陵端 | 9 | 右片袖 | 立柱石 | C2大型1石 縦積+調整石 | 3石横積 | 2.1 | 2.25 | 5.7 | 2.53~ 2.71 | TK 209 | |
| | 11 | 大成8号墳 | 円 | | 台地 | 13基 以上 | 両袖 | 立柱石 | B1石平積+ 調整石 | 4石平・ 縦積 | 2.5 | 2.46 | 左4.55 | 1.82~ 1.85 | TK 209 | |
| | 12 | 新戸1号墳 | 前方 後円 | 全長35 ・径20 | 丘陵端 | 2基 以上 | 両袖 | 立柱石 | D 大型1石 | 3石縦・横 積+調整石 | 2.15 | 2.08 | 左5.96 | 2.77~ 2.87 | | |
| | 13 | 桃谷1号墳 | | | 丘陵 斜面裾 | | 両袖 | 立柱石 | B1石横積+ 調整石 | 5石平・縦 積+調整石 | 1.82 | 2 | 左4.86 | 2.43~ 2.67 | TK 209 | |
| 野田 川水系 | 14 | 高浪1号墳 | | | 丘陵端 | | 両袖 | 立柱石 | D1石横積+ 調整石 | 4石横・ 縦積 | 1.93 | 1.83 | 左4.52 | 2.34~ 2.47 | TK43 | |
| | 15 | 滝岡田古墳 | 円 | 径20 | 段丘端 | 単独 | 右片袖 | 立柱石 | B1石平積+ 調整石 | 4石横・ 平積 | 1.74 | 2.26 | 4.12 | 1.82~ 2.37 | TK 209 | |
| | 16 | 河ノ辺 1号墳 | 円 | 径12.5 | 丘陵端 | 単独 | 右片袖 | 立柱石 | C2大型1石 縦積+調整石 | 3石縦・ 横積 | 2.05 | 2.22 | 4.64 | 2.09~ 2.26 | TK 209 | |
| | 17 | 入谷11号墳 | | | 丘陵 斜面 | 26基 以上 | 右片袖 | 立柱石 | | | 1.5 | 1.5 | 4.8 | 3.2 | | |
| | 18 | 入谷14号墳 | | | 丘陵 斜面 | 26基 以上 | 右片袖 | 立柱石 | | | 1.4 | 1.33 | 3.9 | 2.79~ 2.93 | | |

る。この時期以降、特に1石による奥壁用材として設置可能な巨石の入手・運搬・設置の限界のためか両袖・片袖ともに、前壁幅よりも奥壁幅が狭い平面台形状の玄室平面形が増える。

(2)竹野川水系の両袖式石室

一方、竹野川水系でも丹後町大成8号墳(TK209型式古相併行期)から畿内型両袖式石室

が構築されるが、川上谷川水系の両袖式石室とは異なり、片袖式石室ではあるが、むしろ同じ水系の大成7号墳や上野1号墳と共通する構築技法・用材である。

大宮町新戸1号墳では、巨石使用であることは川上谷川水系の様相と一致するものの、平野古墳ではやや内傾する奥壁上段が新戸1号墳ではほぼ垂直であることなど相違点もある。

(3) 野田川水系の両袖式石室

野田川水系では野田川町高浪1号墳は各壁の用材、羨道部がハの字形に開く平面形、石棚部分を除く玄室平面形がほぼ相似形を示すなど、丹後町大成8号墳に構築技法上のきわめて強い類似を示す。しかし、この古墳も新戸古墳とは異なる構造ではあるものの、石棚を有するものであり、ここに高浪1号墳の被葬者の大成8号墳とは異なる強い独自性が見い出せるため、用材、形態上の一致は共通の石室工人の関与を示唆するものの、両古墳の被葬者の関係はなお検討の余地がある。

4. まとめ

以上、各水系ごとに畿内型石室の様相を検討した結果、当然のことながら石室構築地の近隣で入手可能な用材の形状に規制される側面から石室各壁の壁面構成は水系よりも細かな単位の古墳群ごとに異なるものであることが改めて確認できた。一方、水系をこえて、袖石の形状(川向1号墳と高山1号墳)、用材の選択、玄室及び羨道平面形(大成8号墳と高浪1号墳)などで共通の要素を見いだせるものも確認できた。また、石室平面形の決定には奥(前)壁幅による数段階の規格が存在するものと考えられる。しかし、これらは石室構築にかかわるすべての要素が必ずしも一致するわけではないことから石室構築に共通の工人の関与があった可能性もあるものの、厳密に同一の石室型式による施工を意図したものではないところに、1石室に対する異なる複数の工人の関与、石室構築工人と古墳被葬者との関係を探る大きな課題があるものと思われる。




また、石室構築技法の変化は奥壁構築技法によれば、2石平・横積み(A・B類)から、大型の1石を平・横積みし、残りの部分を調整石で埋めるC類(奥壁大型1石指向)を経て、1石縦積み(鏡石の使用・D類)へという型的発達を読み取られ、おおむね技法A類→D類の順に推移し、技法E類はC類の簡略形態であると考えられる。

(ほそかわ・やすはる＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

※なお図示した関連石室実測図は関係報告書から転載させていただき、須恵器の型式は田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966 にしたがった。

第2表 横穴式石室編年表

| 時期 | 須恵器 | 久美浜 | | 網野 | 竹野川 | | | 野田川 | | 宮津舞鶴 | 北丹波 (由良川) | 南丹波 (亀岡・園部) | 参考 |
|------|-----------|--------------------|--------------------|------------------------|---------------------------|-------------------|-----------------------------------|------------------------------|--------------------------------|------|--------------|-------------------------|----------------------------------------------------------------|
| | | 川上谷川 | 佐濃谷川 | | 上流域 大官峰山 | 中流域 弥栄 | 河口部 丹後 | 上流域 加悦 | 河口部 岩滝 | | | | |
| 後期初頭 | T K 23 | | | | (小池5) | (西小田5) | | | | | (高谷6) | (千歳車塚) | 穀塚 高井田山 |
| | T K 47 | | (南谷C6) | (勝山) | | | | | | | (高槻茶臼山) | (拝田10) (今林2) | 埼玉稻荷山 天竺堂 青山2 (大谷) 番塚 江田船山 |
| 後期前半 | M T 15 | | (南谷B1・4) (南谷B3) | | (大耳尾1・大耳尾2) (帯城3) | | | | | | (稲葉山10) | 北ノ庄14 北ノ庄13 拝田16 | 獅子塚 天塚 曹山1 市尾 墓山 ムネサ カ4 大谷山 6 花山6 大谷山22 関 行丸 |
| 後期中葉 | T K 10古段階 | 崩谷3 | (天王山B1) (天王山A5) | (岡3) (くらがり) (岡2) | (桃山1) (新蔵8) | (太田2) (遠所9) | | | 倉梯山1 霧ヶ鼻11 霧ヶ鼻10 霧ヶ鼻6 | 浦入西2 | 高谷3 | | (鴨稻荷山) (今城塚) 南 塚 物集女車 塚 西宮山 (岩戸山) 寿 命王塚 |
| | T K 10新段階 | 崩谷1 陵神社12 | | | | (坂野4) | 大成7 | 入谷西A1 | 霧ヶ鼻8 | 小田 | 池の奥4 | 医王谷3 小谷17 天神山1 | 大和二塚 |
| 後期後半 | T K 43 | 平野 畑大塚2 湯舟坂2 | 川向1 | | 西外1 (黒田2) 新戸1 | | 上野1 高山1 高山7・高山4 | 高浪1 休場 | | 喜多家奥 | 奉安塚 向野西9 | 小金岐76 小金岐17 小金岐71 | 大覚寺3 鳥土塚 平群三里 藤ノ木 牧野 こうもり塚 |
| 後期末葉 | T K 209 | 畑大塚1 経塚 | 塚ガ谷2 | 岡1 | 砥石場西1 大田鼻 横穴群 桃谷 | 墓ノ谷12 | 大成8 高山12・高山5 高山3・高山6 大成9 | 滝岡田 河ノ辺1 入谷11・ 入谷14 | | | 牧正一 | 小金岐1 | 今里大塚 双ヶ岡1 蛇塚 見瀬丸山 赤坂天王山 岡田山1 |
| 終末期 | 飛鳥I・II | | | | 天徳6 | 奈具岡南5 ゲンギョウの山1 | 上野2 | 入谷15 上司 | 千原2 解谷1 | | 弁財 | 小金岐9 小金岐6 | 石舞台 岩屋山 |
| | 飛鳥III以降 | | | | | | | | | | 山尾 | | |

凡例  片袖式 () 石室以外、不明(未調査含む)
 両袖式
 竪穴系横口式石室およびその後統墓制